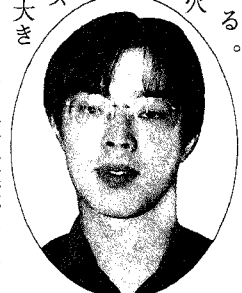


文大生の故郷 都留

このコーナーは、都留文科大学の学生の皆さんに自分の故郷と都留市とを対比しながら第二の故郷である都留市への意見や感想をつづってもらおう、というものです。今まで、学生の皆さんの声を聞く機会はほとんどありませんでした。そこで、「若者の意見をもっと行政に、広く市民に」ということで、これからの市のあり方の参考にし、また、このコーナーが市民と学生の交流の場のひとつになればという思いも込め、いよいよ今月からスタートです。

当世お祭り談義 ～愛すべき都留市民に捧ぐ～

社会学科3年 佐藤周平



私の故郷は青森市だ。実家のすぐ近くで、毎年ねぶた祭りが行われている。「世界の火祭り」と言われるだけあって、スケールが大きい。夜になると、囃子太鼓、笛が

を、宝物のように拾い集めていた。小学校に上がると、子どもねぶたにも参加した。これは、普通の大型ねぶたの前座として加わる、小型ねぶたである。近所にねぶたを作っているテントがあり、子どもを集めて笛吹きなどの指導を行っていた。都留でも八朔祭の行われる前に、谷村駅の近くで子どもが笛の練習をしているが、それを見

囃子太鼓、笛が暗闇の中、鮮やかに赤色が映える二十数台のねぶたが、国道を一杯に使って躍動する。「ラッセラー、ラッセラー」と「はねと」(ねぶたの後列で踊り跳ねる人)が掛け声をかける。私は幼いころからこの祭りが好きで、はねとの衣装からとおちる鈴

ると私も当時のことを思い出す。太鼓をたたく人に憧れて練習をしたが、たたく力が弱くて、本番ではやらせてもらえなかった。代わりに、祭りに参加する人が飲むための水をバケツに入れて、それをリヤカーで運ぶ係をした。華やかな役ではなかったが、大衆の見つめる中、ねぶたの行進に加わることで、幼い心は興奮した。高校の時は、自分もはねとで参加した。若者たちにとつては、ラッセラーもくそもなく、ただ狂気乱舞、デイスコ状態である。私もエネルギーがあり余っており、最前列でガンガンに跳ねまくって、ねぶたが終着点に着きそうになると、まだ後ろに残っているねぶたの方に走って戻り、再び跳ねていた。だが、都留大に入學し、ねぶたを見に帰省する様になってからは、もっぱら見学組に回っている。最近は何光客も激増し、何か恐い感じすらする。実家は商売をしているが、家の前の道路には無造作に観光バスが駐車し、親がよく運転手を注意しに出掛けしている。はねとの中には、カラスと呼ばれる黒装束の暴走族が加わって暴れ、社会問題になっている。周りの人間の迷惑を考えない祭りは、ただのばか騒ぎにすぎないと思う。確かに、祭りとは日常の憂さを忘れ、感情を高ぶらせる要素があるから、規制は極力すべきでない。だが、あまりに秩序がないのは見苦しい。

最近、八朔祭の大名行列を見た。狭い通りを、ゆつくりと行列が進む。観客を見ると、近所のおじちゃん、おばちゃん、お年寄り、中には下校途中の女子高生もあり、自転車から降りて眺めている。都留は城下町だったこともあり、「下に1、下に」と殿様が通るのは様になっていく。お姫様が手を振っており、顔を見たらかなりの美人だった。観客のおばちゃんたちが、「あの姫、市民でなくて、外部からきてもらっているんじゃない」「まあ、他の人たちと顔が違うと思ったらやっぱりねえ」と話していた。私は、それを遠巻きから眺めてニヤニヤしていた。祭り自体がねぶたの様に動的でないこともあるが、何か秩序がある。観客は騒がず、行列の進行を妨げもせず、ただ祭りを楽しんでいる。近所から集まった顔見知り同志が、くつろいで話をしている。こういう祭りもいいなと感じた。

実はねぶたもいつも騒がしい訳ではなく、八月七日の最終日だけは昼に行われるため、若者たちは仕事もあるせいであまり参加しない。そこには、本場にねぶたを見るのが好きな人たちが集まり、今年もこれで見れなくなるねぶたに、名残惜しく視線を向ける、そんな雰囲気がある。私はこの昼のねぶたが好きで、倉庫にしまわれねぶたをいつまでも見送っている。この瞬間だけは、観光客にも見付けられずに、そっとしておいてほしいと思う。

八朔祭には、まだこうした静かな雰囲気が残っている。とはいえず、一年で最も多くの人が集まるので、ただでさえ狭い道がぎゅうぎゅうづくめになる。でも、例えば道路を拡張して、もっと行事を拡大し、

観光客をたくさん呼んだりすることとは、本当にいいことかな、とも思う。素朴な町には、素朴な祭りが良く似合う。市の行政もそうだと思う。物質的な豊かさを求めることが、必ずしもその町の幸せにつながるとは言えないのではないか。昔は盛んだった織物産業が、外国製品に押されて下火になっている。でも、この町には文化がある。うぐいすホールでは市民団体による音楽行事が盛んに催される。この町には知恵がある。狭い路上で、酒場で、市民も学生に気さくに語りかけてくれる。肩を寄せあって話し合うことで、子どももまっぴり様な地域行事も生まれた。学生同志も仲が良く、全国の大学で同棲率が二番目だそう。あれ、それで思い出したが、私にはまだ彼女がいらない。読者の皆さん、誰か紹介してください。顔写真は一番まともなものを担当者に渡しておきましたから。

には下校途中の女子高生もあり、自転車から降りて眺めている。都留は城下町だったこともあり、「下に1、下に」と殿様が通るのは様になっていく。お姫様が手を振っており、顔を見たらかなりの美人だった。観客のおばちゃんたちが、「あの姫、市民でなくて、外部からきてもらっているんじゃない」「まあ、他の人たちと顔が違うと思ったらやっぱりねえ」と話していた。私は、それを遠巻きから眺めてニヤニヤしていた。祭り自体がねぶたの様に動的でないこともあるが、何か秩序がある。観客は騒がず、行列の進行を妨げもせず、ただ祭りを楽しんでいる。近所から集まった顔見知り同志が、くつろいで話をしている。こういう祭りもいいなと感じた。



ねぶたまつり (青森)